

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第44回 読書から学ぶ

私が参加しているCN K-M(中野一司先生のメーリングサイト)で在宅医療に関わる沢山の医療者の方々の声が飛び交っており、がん患者として自分の行く末についてもどうあるべきか考えさせられる事が多い。その場で沢山の本が紹介さ

本から学ぶ患者の“生き方”

れ、最近つい買ってしまった本が数冊ある。

- ・小澤竹俊先生の「死を前にした人にあなたは何か出来ますか?」
- ・二ノ坂康保喜先生の「逝くひとに学ぶ」
- ・上野秀樹先生の「認知症 医療の限界、ケアの可能性」
- ・中野一司先生の「続在宅医療が日本を変えろ」(拝受)
- ・森田洋之先生の「破綻からの軌跡」
- ・大熊由紀子先生の「誇り・味方・居場所」
- ・上野千鶴子先生の「ケアのカルスマたち」などなど(拝受)

中野先生、上野先生、森田先生は、既に地元益田市にお呼びしている。

どの先生とも面識が有るので、尚更読みたくなる。患者にとって都合のいいことばかり書いてあるとは限らないからという気持ちにもなり読み漁った。

先日看護学生のがんサロン見学で、小澤竹俊先生の著書「死を前にした人にあなたは何か出来ますか」から、あるセッションを活用させていただき研修で使った見たが大成功だった。さらに森田洋之先生の「破綻からの軌跡」は市行政へ危機感を持って事にあたる提言に活用している。夕張市の記録が多く地元市民に危機感を持ってほしかったからだ。

渋谷長寿健康財団の大河田浩右先生から1冊の書籍が届いた。「進行がん、ステージ4でも怖くない」。だがその先生とは全く面識がない。誰か仲間が私のことを教えてくれたのかもしれない。私と同じ膀胱がんを患い、闘病され寛解中とのこと。医師の視点と患者視点とはどのように違うか。興味があり、一気に読み終えた。第一に感じたことは、こんな主治医であったなら患者はどんなに有難いか。医師選びが大切とか、リンパ球を減らさないようにとか、患者本人の基本道理の努力が大切など闘病する心構えが書かれてあった。

「患者自身が主治医」のつもりで病気に向き合うことが必要であろう。